

# 岩手県江刺人首のキリスト教 ——新たな教会の成立と信者数の変遷から垣間 見える時代背景——

及川 宏幸

キーワード 奥州市江刺区人首地区    ハリストス正教    カトリック  
信者数変遷    歴史的・時代的要因

## はじめに

本調査のきっかけは、岩手県江刺市（現在の奥州市江刺区）の中でも特に最東端に位置し過疎地域と思われる人首地区<sup>1</sup>内に、ハリストス及びカトリックの二つの教会と神道方式で葬祭を行う神葬祭地区が存在する地域<sup>2</sup>であることを偶然知り、興味と違和感を感じたこと。その後この地域の上記の状況と過疎地域であることのギャップにも興味を抱き、このような現状・状況が出現し今に至る過程背景を知りたく思い私的に調査に入ったのが本稿執筆のきっかけである。調査時期は平成2年から平成5年までであり、以後手つかずのまま現在に至る。平成30年に入り、偶然自らの調査データを見つけ、次第に当時調査に協力していただいた話者の貴重な記録を、長い間放置してきたという自責の念にかられたこともあり、その頃の調査データと当時の書きかけの論文を、今回整理し直し執筆することとしたのが本稿である。また今回まとめるにあたり、今現在日本全国各地に進行し現実問題化しつつある、過疎化のもたらす社会的・地域的・宗教的な問題の諸相を先取りした地域・事例のようにも思われた

- 
- 1 人首という地名は、現在の奥州市江刺区米里地区が明治8年まで称していた人首村の名称から来る古い呼称であり〔江刺市1979p666、江刺市1990p223〕、現在でも教会名や小学校名にも付されている。中には人首と称して米里を指す市民・住民もいるほどである。現在人首の地名は、米里の中心街地区を指す地名に残されているが、本稿では地区民が日常的に用い、尚且つなじみのある人首の地名を用いて、現在の米里地区を表している。
  - 2 600軒余りある米里地区内に、曹洞宗自徳寺檀家420軒の他、ハリストス正教とカトリックの二つの教会信者、神葬祭実施地区、創価学会員信者、浄土真宗信者等多様な宗教信者の存在が見られる地域である〔平成5年10月24日、自徳寺住職 故 利府透環（大正7年生）さん談〕。

ため、25年前の調査データを掘り起こし今回公開する形ともした。今回本稿では上記の問題のうち、特に人首のハリストス正教とカトリックの両キリスト教会に焦点を置いて見ていくことにしたい。

ところで、キリスト教が日本の村落に入り、定着するには困難がつきまとうと想定される。常識的には、地方の社会において一旦新しい習俗又は宗教が入ってきて、それを受け入れ定着させる素地・要素または要因がなければ、成立せず長続きせずに消えてしまうのが普通と思われるからだ。ということはこのような人首の二つの教会と多数の信者の出現は、教会側からの働きかけや当時の時代背景等の理由の他に、この人首という地域社会がキリスト教を受け入れやすい要因を持った地域ではなかったのかとも考えることが出来る。そこでこの人首地区の地理的な特徴をあげるとするならば、以下の三点が先ず上げられよう。

- (a) 内陸部と沿岸部をつなぐ気仙街道そして遠野への街道、郡内南北をつなぐ交通の要衝にこの人首が位置していたこと。

[江刺市1985p37～47、平凡社1990p293]

これに関しては特に現代よりも、鉄道開設以前の時代に、この要因が大きかったものと想像される（明治23年水沢駅開通、大正2年釜石線土沢駅まで開通、大正14年大船渡線摺沢駅まで開通。〔江刺市1987p615〕）

- (b) 城下町または繁華街としての町部の存在。〔平凡社1990p293〕

- (c) 旧人首村内に数多くの鉱山があったこと。

[平凡社1990p294、江刺市1985p511～515、江刺市1987p357～362]

つまり江戸期から形成された城下町（正式には人首城ではなく人首要害〔仙台郷土2012p71～76〕）としての存在、交易の中核地としての存在、そして鉱山の存在による外部からの流入等、常に他地区に比べて外との交流接触が日常的にある環境であり、別の視点から言えば新しい事柄を受け入れやすい土地であったとも捉えうる事が出来る。

上記の“地理的要因”も含め、今後はこの人首地区の特徴や多面的な要因を上げながら、分析を試みていきたい。そこで本稿では上の“地理的・社会的な

要因”を次稿に回し先ず、①人首における“歴史的・時代的な要因”を切り口として「ハリストス正教、カトリック両教会の分布域」「人首のキリスト教の歴史」「人首両教会の行事」「信者数の変遷」の四つの側面から、上記の謎の、人首へのキリスト教流入の過程と背景、そしてその後の経過に迫っていきたいと思う。次稿以降では②人首における“地理的・社会的な要因”を切り口として「信者減少・脱会の原因理由」「人首地区の人口変動」「信者分布地区」(予定)等の側面から分析する形で、実相に迫っていきたく思っている。

## 1. ハリストス正教、カトリック両教会の分布域

先ずはじめにハリストス正教、カトリック両教会の布教の跡、痕跡として、岩手県の両派の教会所在地又は信者地区の所在について確認すべく、以下に列挙してみることにする。

※細字は市中心都市部を、太字は市周辺郡部町部に位置していることを明示した。ちなみに太字は著者によるアレンジである。

### 〈ハリストス正教 岩手県内分布域〉<sup>3</sup>

盛岡地区…盛岡教会、遠野教会

一関地区…一関教会、日形、**奥玉**、**大原**、**曾慶**、岩谷堂、**人首**の各教会

盛地区…盛教会、**山田**教会及び宮古・釜石地方

### 〈カトリック 岩手県内分布域〉

一関教会、大船渡教会、釜石教会、北上教会、久慈教会、志家教会（盛岡市）、**千厩**教会、**田茂木**教会（室根村、巡回教会）、遠野教会、二戸教会、花巻教会、水沢教会、**人首**教会（水沢教会の巡回教会）、宮古教会、盛岡上堂教会、四ツ家教会（盛岡市） [カトリック1994p73～74]

3 故 菊池修行さん教示及び日本正教会 H30年 8月30日ホームページより。

ちなみに盛岡ハリストス正教会（盛岡市高松）は明治期岩手、青森、秋田を管轄する中心教会（日本正教会 H30年 8月30日ホームページ）であり、人首の教会は、明治から現在まで盛岡ハリストス正教会の管轄である様子 [平成2年 8月15日 故 菊池修行さん（明治43年生）談]。

上記の両教会信者地区のうち、細字が市中心都市部に、太字が市周辺郡部町部に位置していることを明示したが、岩手県ではカトリック教会は都市部に多くの教会及び信者地区が位置しており、ハリストス正教の方が4割（教会数での割合）ほど郡部に位置しているのがわかる<sup>4</sup>。このうち太字の市周辺郡部町部に限定して両派を見比べると、唯一岩手県内で両派の教会が位置する、重複する地域として人首地区（現奥州市江刺区米里）が見て取れる。都市部に位置しない周辺過疎地域に、2つのキリスト教信者地区が重複する唯一の場所としての人首地区に、今後焦点を当てて見ていくことにする。

この人首地区は、現在奥州市江刺区米里と称しているが、本稿では調査当時両教会名にも付され、住民及び話者が日常的に話す旧称地域名の人首で記すこととする。岩手県中南部域に位置するこの地区は江刺市時代、江刺市10地区中最東端に位置し、四つの郡と北上山地に接する典型的な過疎地域であった<sup>5</sup>。このような過疎地域にどのような経緯で二つのキリスト教教会<sup>6</sup>が設立され、そしてどのような過程を経てこの地区に定着して現在（調査時の平成5年当時）に至ったのか、素朴な疑問が沸き上がってくる場所である。ちなみに人首は、盛岡に次いで岩手県内二番目に教会堂（明治17年カトリック）が建てられた場所であるとも聞く〔江刺市1987p262〕。またハリストス正教もそれから間もない明治23年に、人首に教会堂を建てている〔江刺市1987p264〕。このような過疎地域に2種類のキリスト教が早いうちから伝播し、かつ現在（平成5年現在）も信者が現存しているというその理由・背景について、考えてみることにしたい。そこでここでは人首のキリスト教の“歴史的・時代的な要因”について焦点を絞りこみながら整理・分析作業を進めたい。ところで、ハリストス正教、

---

4 内海健寿1979p48によると、明治期ハリストス正教は他の教派に比べ、山間僻地まで入って伝道し、小さい町村にも明治30年頃までに講義所、教会を建てたとある。

5 昭和30年に江刺郡内十町村と合併し江刺市米里となる。昭和35年現在米里人口は4270人、平成2年現在の人口は2330人〔江刺市企画調整課統計調査係提供データ〕。

6 正確には両キリスト教の教会があった。平成5年現在、ハリストス正教の教会堂は昭和8年と27年の火災で焼失して人首に教会堂は存在せず、人首教会は昭和58年から江刺市岩谷堂教会に合併された形になっている〔日本正教会 H30年8月30日ホームページより〕。本稿p26、27参照のこと。また平成5年現在、カトリックは教会の建物はあるが、信者は昭和25年以降、発足した水沢教会の巡回教会となっている〔水沢カトリック教会1982p6〕。

カトリックという二つのキリスト教の全国的な展開状況を以下に示してその特徴を見ることとする。

#### 〈ハリストス正教の全国的分布域〉<sup>7</sup>

①東京大主教教区(教会数23)、②東日本主教教区(事務局は仙台で東北・北海道を管轄、教会数33。うち岩手県9、宮城県12、北海道9、その他3)、③西日本主教教区(事務局は京都、教会数16)。

※①～③の総計は教会数72。

平成5年時点では、ハリストス正教は本部がニコライ堂に置かれ、さらに日本においては区域が3つに分けられ、3つの地域組織を持つ。教会数のみ見ていくと、ハリストス正教は東日本に明らかに偏在しており(全国総数の約46%)、特に東北地方の岩手・宮城両県(全国総数の約30%)に集中分布している状況の教派といえる。ちなみに上記の教会数は平成5年現在のものであるため、明治期のハリストス正教会教会数を見てみると、宮城県に52教会(会、講義所、伝教所を含む)ほど確認され〔国立歴史民俗博物館、逸見1984p174〕、現在の教会数の4.3倍までに至っている。時代をさかのぼるほど、明治期のハリストス正教の異常な高まりがこの数字の背景に伺え、同時期の岩手県でも同様な状況が想定される。

平成7年度時点の日本におけるカトリックの組織は、以下のとおりである。

#### 〈カトリックの全国的分布域〉

①札幌教区(教会数64、巡回他5)、②仙台教区(教会数57、巡回他12、うち岩手県は14(その他巡回2)、③新潟教区(教会数35、巡回他13)、④浦和教区(教会数52、巡回他9)、⑤東京教区(教会数75、巡回他6)、⑥横浜教区(教会数85、巡回他11)、⑦名古屋教区(教会数50、巡回他11)、⑧京都教区(教会数48、巡回他11)、⑨大阪教区(教会数89、巡回他4)、⑩広島教区(教会数41、巡回他7)、⑪高松教区(教会数27、巡

7 キリスト新聞社1993p339～340。ちなみにキリスト新聞社1993『キリスト教年鑑1993』と盛岡・盛ハリストス正教会連絡協議会1981『盛岡・盛ハリストス正教会管轄教会信徒名簿』のハリストス正教会教会数は、巡回教会数値の違いで上記の数字と数が一致していないが、とりあえずキリスト新聞社1993『キリスト教年鑑1993』の数で示したもの。

回他6)、⑫福岡教区(教会数56、巡回他12)、⑬長崎教区(教会数72、巡回他58)、⑭大分教区(教会数26、巡回他3)、⑮鹿児島教区(教会数28、巡回他43)、⑯那覇教区(教会数13、巡回他7)

[カトリック中央1994]

※全国16地区に分けられており、教会数の総数は巡回教会を含めない分のみで合計818、巡回含んで合計1036。

上記の通り、日本のハリストス正教会は東日本の特に東北地方に偏在しているが、カトリック教会は対して日本各地に均等に存在し、さらに教会数はハリストス正教72に対してカトリック1036と、14倍以上の教会数であることもわかる。

この違いを単純に考えてみるならば、次項に述べる二つのキリスト教団の歴史がこの違いに起因しているようにも思われる。ハリストス正教は函館から北日本を中心に布教が開始され<sup>8</sup>、それ以降日露戦争期をのぞく明治期に布教が順調に伸張した。ちなみに大正元年時点での岩手県におけるキリスト教各派の教勢分布を見ると、内海健寿の調査では30ある教会及び講義所のうち、15カ所をハリストス正教が占め(カトリックは4カ所)、信者数も63%を占める状況であったことから(カトリックは10%)、岩手県における明治期までのハリストス正教の教勢が著しく際立っている様子が伺える〔内海1979p47、岩手県1965p842〕。しかし一転して日露戦争や大正6年にロシア革命が勃発したことで、ロシア本国からの送金が停止されることとなり、その後の日本における伝教者の半減(大正5年まで常時全国に115人居たが、大正7年からは57名と半数に激減〔内海1979p59〕)と、各施設の廃止、受洗者数の激減状況に陥る(大正5年の年間受洗者が961人であったのが、大正7年には465人に半減した〔内海1979p59〕)。さらにロシア本国での教団混乱から来る諸影響の結果、東日本布教を手始めに西日本布教へ本格的に歩み出す手前で教勢が退潮していったので

8 またハリストス最初期の信徒のほとんどは旧仙台藩士であり〔山下2014p13〕、初期布教が最初期信徒出身地の仙台藩近辺から始まったこと〔山下2014p24、180、186～187〕。また所によっては土族の教会というイメージが強く、土族以外の人々の足が遠のく教会の場合も見られたこと〔山下2014p106p111〕等の特殊事情が見られる。

はないかと推測されるような、そんな変形的な分布を示している傾向が見える。一方カトリックは、泉 琉二によると、登録信者数が明治20年から昭和15年までの53年間で3.3倍、戦後はさらに昭和21年から43年までの22年間で3.2倍と飛躍的な増加傾向が伺え、ハリストス正教と対照的な様相が見える。

〔泉1972p101～102〕

次に人首教会に絞った両教会の歴史的経緯について次項にまとめ、傾向を見て行くことにしたい。

## 2. 人首のキリスト教の歴史

人首のキリスト教会設立とその後の歴史については、以下の年表にまとめてみた。特にハリストス正教に関しては、先に挙げた通りロシア本国との関係及び影響がきわめて大きい側面があるため、その部分の歴史も含めて記した。

### 〈人首ハリストス正教会の歴史〉

※【 】部分はハリストス正教会の全国的な歴史の部分

〔明治元年…箱館でニコライから沢邊琢磨（高知県出身）・酒井篤礼（宮城県金成出身）・浦野大蔵（岩手県宮古出身）の三人が教理を学び洗礼を受ける。〔川端1989p24、宮城県1961p619～620〕〕

明治11年頃…米里村菊池某<sup>9</sup>、現在の一関市大東町大原に行った際に、その地の佐伯ペートルに教えを受け、人首への布教を求める。  
〔岩手県教育會1925p228～229〕

明治12年…10月、副伝教師山内長蔵、人首に来て福音する。来る者28,9名。11月、司祭の啓蒙を受ける者18名。<sup>10</sup>

明治13年…4月4日、神父より洗礼22名。5月2日復活祭祝宴、来る者信者以外合わせ40有余名。7月、山内長蔵（イヤコフ）人首

9 人首の初期信者で明治23年に選定された布教委員10名（本稿 p26）を見ると、旧士族は菊池秀三郎のみのため〔江刺市史編纂委員会1978p33〕、人首の教会は一般の集落民が作り上げた教会例と思われる。また信者分布を見ると繁華街の町中心部に信者分布が集中して見られるため、商売や郵便局・役所等の職業をしている者等と想定される。

10 人首ハリストス正教会 1898、岩手県教育會江刺郡部会1925p229

教会専任となる。<sup>10</sup>

明治15年…景気不況、参拝者少なし。供給費少なくなる。<sup>10</sup>

明治16年…12月15日、初めての信徒親睦会開く。討論、教理研究をする。<sup>10</sup>

明治17年…5月4日、日曜学校を開設。<sup>10</sup>

明治23年…1月3日、教会堂落成。<sup>10、11</sup>

10月25日、布教委員十名選定<sup>9、10</sup>。佐賀文三郎、菊池秀三郎、菊池金五郎、菊池亀三、八巻孫四郎、佐賀忠作、菊池熊太郎、菊池登根、佐賀梅、菊池定。

明治26年…ニコライ東北巡回の途中、人首に来る。<sup>12</sup>

明治34年頃…演説会、婦人会、日曜学校、討論会あり。<sup>13</sup>

【明治37年…日露の国交断絶、日露戦争開始。正教徒の迫害を受ける騒ぎ起こる。〔宮城県1961p626〕】

【大正6年…ロシア革命が起こり、これ以降ロシア正教会から日本正教会への財政的支援が途絶え、教役者の退去・辞職相次ぐ。〔内海1979p58～62、仙台ハリストス2004p115、p117～118〕】

【大正12年…関東大震災でニコライ堂が被災し修復必要となるが、費用工面難し。】

大正末…信者120名余り。<sup>13</sup>〔江刺市1990p107〕

昭和8年…人首の教会堂大火で焼失。〔江刺市1990p107〕

※昭和8年人首町大火災で17戸焼失。〔江刺市1979p667〕

【昭和23年以降ニコライ堂派（在北米のロシア教会系）と正統正教会（ロシア系）が分裂。〔キリスト1993p341〕】

昭和27年…人首の教会堂焼失。〔江刺市1990p107〕

11 江刺市史編纂委員会 1987p264、江刺市史編纂委員会 1990p107、江刺市史編纂委員会 1979p666

12 岩手県教育會江刺郡部会1925p229、江刺市史編纂委員会1987p264、江刺市史編纂委員会 1990p107

13 江刺市史編纂委員会 1987p264、岩手県教育會江刺郡部会1925p229

【昭和45年にニコライ堂管轄教会がロシア母教会に帰順。

〔キリスト1993p341〕】

昭和56年…信者24名。〔盛岡・盛ハリストス1981〕

昭和58年…信者不足で岩谷堂教会に人首教会が合併。<sup>6</sup>

平成5年…信者数17名前後（信者6軒）。<sup>〔23 及び筆者調査〕</sup>

この年表を見て、気になる所が二ヶ所あるのでそれを少し述べたい。その一つは、キリスト教の人首流入と定着の理由である。はっきりとは分からないが、年表を見る限りハリストスに関しては、明治11年頃に村人菊池某が現一関市大東町大原に行った際に、佐伯ペートルに正教の大意を聞いて求道の心を起こし、佐伯氏に人首地区に布教することを進め、その要請で入ってきたものとのことである<sup>14</sup>。カトリックの場合は、本稿p29に年表を示したがそれによると明治10年、カトリック信者が偶然にも婿養子で人首に来たことから始まっている。日本のハリストス正教は明治期ニコライによって布教が始められ、当初は各地で軋轢を生みながらも〔波多野 1976 p633～642、逸見1984〕明治期順調に教勢が拡張していく。ここ人首においても、ハリストス正教側の当時の記録を見ると、初期の信者増加の様子的一端が見て取れる。ところでハリストス信者の入信時期を年表から探ると、大きく三つに分類されるように思われる。①布教初年の明治12年当初から30名あまりの村人が福音に集い、翌13年には早くも22名の洗礼者が出ている。この過程を見ると異常なほど住民からの期待が垣間見られる<sup>9、14</sup>。明治13年のこの年、教会専任者が着任する。②次に明治16年～17年にかけて、初めての信徒親睦会、討論、教理研究が開かれ、日曜学校も開設される。この時期は教会側からの信徒会の充実と布教活動の強化が計られた様子が伺えるが、反面現在（平成5年度現在）見られない上記の行事名に、当次第に高まる信徒の意向がこれらの活動開始に反映した結果とも見て取れる。これらの様子から地域社会の人々にとって、封建社会から近代社会への移行期

14 江刺市史編纂委員会 1987p264。日本のハリストス正教の場合は、最初期の信者は士族が多く〔山下2014p13、宮城県1961p620～625〕、宮城県の教会例の報告ではその後、商人や役人、民権家など社会の活動の中核となる層も見られる〔波多野1969p384～385、佐藤1984p243～244、佐藤1992〕。人首教会の場合は註9の通りである。

である明治時代に、新しい思考・社会・倫理観への対応を求められた面、新しい思考様式や行動様式が求められた面から言えば、キリスト教はその点当時非常に魅力あるものと映っていたように想像される〔波多野1976 p630～631〕。他方で政府からの弾圧及び住民との軋轢も当然見られた〔波多野1976 p633～642、逸見1984〕。

次に③明治23年教会堂落成にともない、布教委員十名が選定され、布教活動の強化がはかられた。明治26年にはニコライが人首を訪れ、明治34年頃には演説会、婦人会、日曜学校、討論会が催され、明治のこの時期は現在見られないような活発な活動が見られる〔山下2014p259～260〕。人首教会においては、大正末に信者120名にも及び、人首教会史上最大の信者数を記録している。しかし一転して大正6年になるとロシア革命が起り、ロシアで政府による宗教弾圧が起きて以降、ロシア正教会からの日本正教会への人的財政的支援が途絶え、教会に逆風が吹きまくることとなる<sup>15</sup>。昭和8年に人首ハリストス正教会堂が大火で焼失。GHQ 日本統治期の昭和21年以降、ニコライ堂派（在北米のロシア教会系）と正統正教会（ロシア系）が分裂〔キリスト1993p341〕。昭和27年には人首の教会堂が再び焼失。昭和58年には信者不足で岩谷堂教会に人首教会が合併することとなる。昭和56年時点で信者24名在籍。平成5年現在で信者数17名前後（6軒）となる。以上のように見ていくと、ハリストス正教の日本教会自体がロシア国内及び国際的な情勢の関係で急激に教勢が縮小していく過程と、人首教会の不運とがダブルで重なる様子が見られ、信者数を含め時代の経過とともに、一気に教勢の退潮に向かって推移してきたと見てとることが出来る。

次に人首カトリック教会の年譜を見てみる。

---

15 明治10～45年までの、宮城県石巻伊望教会信徒領洗者数の変遷データ〔波多野1969p385〕を見ると、明治32年以降は、年間の領洗者数が日露戦争に至るまでの急激な減少傾向を示していることから、他県の教会例ではあるが、時代の反映と言う点から見れば、人首ハリストス正教会の場合も、信者数の減少傾向は明治期後半から始まっていたとも想定される。尚、波多野のこの変遷データ〔波多野1969p385〕は、明治期日本における、ハリストス入信者数の全体傾向の典型例を示しているようで興味深い。

## 〈人首カトリック教会の歴史〉

明治10年…カトリック信者菊池文三郎<sup>16</sup>、水沢から養子として人首にきた。その縁でフランスの宣教師ベリオス、信者訪問のため人首に来て布教〔岩手県教育會1925p228〕。

明治17年…教会堂を建立。岩手では盛岡に次いで出来た第2号目の教会〔江刺市1987p262、江刺市1990p107〕。11月、佐藤宗治そして菊池一家が最初の洗礼者となる<sup>17</sup>。

明治19年…明治19年までの受洗の信者は52名<sup>18</sup>。人首教会は巡回教会で司祭の常住無し。平常は伝道師又は信徒による管理〔江刺市1987p262〕。

明治22～26年…受洗者この時期の一時期少なくなる<sup>19</sup>。

明治41年…信者およそ60人。〔水沢1982p5〕

明治37～38年…教会前に鐘の塔が建てられ、フランス製アンジュラスの鐘が付けられる。〔水沢1982p6〕

大正14年…信者40余名〔岩手県教育會1925p228〕。教会の所属は盛岡から、一関の巡回教会へと変わる〔水沢1982p6〕。

昭和25年…人首教会、発足した水沢教会の巡回教会となる。

また岩手県の福音活動が、フランスのバリミッション会などから、

- 16 江刺市史編纂委員会1990p107には菊池又三郎とある、水沢カトリック教会『江刺市人首カトリック教会 百年間の歩み』p2によると、菊地文三郎とある。尚、人首の自徳寺共同墓地のキリスト教信者墓地には、明治24年没の菊池文三郎の墓が残るため（平成5年2月確認済み、平成30年9月確認出来ず）、ここは菊池文三郎とした。
- 17 これは菊池文三郎家族と想定される。菊地1986p20によると明治17年11月、佐藤宗治と同時に文三郎の妻、妹も同時に受洗したとある。尚この名字の菊池は菊地の可能性もあり。
- 18 菊地和恵1986p42、四ツ家カトリック教会『巡回名簿』（1884～1908）。ちなみに『巡回名簿』を調べた菊地和恵1986p41では明治17年から19年までの合計受洗者数が52人（本稿 p38表3参照）、菊地和恵1986p42では明治19年までと推測される合計信者数が54人との記録も見え、多少の誤差が見える。また江刺市史編纂委員会1987p262には、明治19年までの受洗信者数は39名〔人首教会『信者名簿』（1897）〕とあり。ここでは52人とした。なお四ツ家カトリック教会『巡回名簿』（すべてラテン語で記載）に関しては、今回（平成30年9月）四ツ家カトリック教会への資料閲覧の依頼をした後連絡が無く、結局調査が出来なかった関係から、菊地和恵氏の著述を参考に使用したもの。
- 19 菊地和恵1986p41表2「人首カトリック教会年ごとの受洗者数」、四ツ家カトリック教会『巡回名簿』（1884～1908）、水沢カトリック教会1982p4

スイスのベトレヘム外国宣教会へ変わる。〔水沢1982p6〕  
昭和38年…自徳寺共同墓地内に聖母の像建てられる。〔水沢1982p7〕  
昭和48年…教会の外部と鐘の塔を改造。〔水沢1982p7〕  
昭和57年…10月に人首教会100年祭実施。〔水沢1982p7〕  
平成2年頃…信者数10数人。〔江刺市1990p107〕  
平成5年…信者数6人〔筆者調査〕。ベタニア修道女会からシスター着任。<sup>20</sup>

カトリックの人首布教は、明治10年でハリストスよりも2年早い。教会堂建立は明治17年で、ハリストスよりも6年早い。しかも岩手県で盛岡に次いで二番目の早さである。この点でハリストスも含めて、人首地区は岩手県でも草創期のキリスト教布教地という特徴を持つ。以下に年表等から見る人首カトリック教会の転機が6時期に分けられるようであり、それを記してみたい。①始めに、人首から洗礼者が生まれるまでに明治10年～17年と7年を要している。その後、明治19年までの時期に52名の受洗者を出していること<sup>18</sup>。②次にそれ以降明治22年から26年までなぜか毎年受洗者一桁台と少なくなる（本稿 p38 表3 参照）。この理由としてこの時期、ハリストス正教教会堂が人首に完成し、ニコライもこの地に来るなどハリストス正教が人首地域の人々の注目を受けたことと、カトリック司祭の巡回が少なくなったことの二つを教会側は理由に上げている〔水沢1982p4〕。③次に明治27～明治31年には一転して受洗者が毎年二桁台まで上昇し、④その後明治32年以降記録の見える明治41年まで、毎年0～3人の受洗者まで激減し、新たな信者の獲得が難しくなっていく様子が見られる（本稿 p38 表3 参照）<sup>19</sup>。結果的には、明治17年から明治31年までの信者入

20 平成30年10月に調査した、平成5年以降の人首カトリック教会関係の年譜は以下の通り。  
平成22年…人首に信者が居なくなり、人首カトリック教会建物が閉鎖される。また建物も老朽化のためこの頃取り壊される。〔平成30年10月22日高橋昌水沢教会神父談、胆江日日2013〕  
平成23年3月…東日本大震災で自徳寺共同墓地内の聖母の像倒壊する〔高橋昌神父談〕。  
平成23年4月以降…教会跡地の鐘を、地元有志と小学生が午後5時に鳴らす役を担い始める〔胆江日日2013〕。  
平成25年5月…教会跡地に新鐘楼と公園が整備される〔胆江日日2013〕。  
教会跡公園整備事業を進めた米里振興会山崎勝会長自身も信者では無いが、毎週末ミサに通った一人であり、現在人首に信者は居なくなったが、今いる住民の心にも、教会の残した影響の様子が伺える〔胆江日日2013〕。

信が相次ぐ信者第一世代の明治期が、人首カトリック教会の信者数ピークの時期といえよう。明治41年には信者数が60<sup>21</sup>名、大正14年には40余名とも記録が見られ、明治期後半から大正期には、入信者・受洗者が少なくなっていく。この時期の現象は、資料が見いだせないため明治期前期に入信した高齢信者層の自然減、もしくは転出等の社会減に伴う信者数の減少、幼児洗礼者の減少<sup>22</sup>等と想定される。

教会側の説明では、⑤昭和期に入ると軍国主義と第二次世界大戦の混乱のためか教会は寂しくなりとあり〔水沢1982p4〕、⑥昭和25年には人首教会が、発足したばかりの水沢教会の巡回教会となってしまう〔水沢1982p6〕。昭和48年には、教会の外部と鐘の塔を改造とあり〔水沢1982p7〕、以前から朝な夕な人首地区に教会の鐘の音が響いていた様子が伺え、鐘の音が鳴るたびに、地区の人々にとって教会の存在を日常的に意識せざるを得ない状況が想起される。平成5年信者数は6名ほど。本稿p25「ハリストス正教、カトリック両教会の分布域」の項で記した通り、全国的に見て、カトリックは戦前に比べ戦後信者数が3倍以上に増大している。しかしここ人首カトリック教会においては明治期をピークとしてその後、信者数が下降しており、全国の様相とは連動していない様子である。いずれにせよ、人首地区でのハリストス、カトリック両教会は明治期までに信者数が膨張し、明治の後半もしくは大正期過ぎて以降信者数の減少が顕著になっていく現象が両教会とも共通して見られる。ハリストスは全国の様相と人首の様相が一致し、カトリックは全国の様相と人首が真逆の様相を呈しているという。人首における信者減少の様相は人首地区の地域、社会的要因による所が大であるとみられる。

### 3. 人首両教会の行事

人々が信者になる契機及び信仰の継続には、教会への日常的な行事参加が必

---

21 水沢カトリック教会1982p 5。しかし菊地和恵1986p41表2「人首カトリック教会年ごとの受洗者数」(本稿p38参照)、四ツ家カトリック教会『巡回名簿』によると、明治17年から明治41年までの信者累計は179名に達している。

22 平成5年9月15日、故菊池十三雄さん(大正13生)からの聞き取り。

須であり、信仰を持ち続ける上での大きなモチベーション（場・機会）と思われる。ここでは信徒の信仰をつなぎ止めたであろう各種の行事を、聞き取りを元に整理する。

#### 〈人首ハリストス正教会の各種行事〉

- 復活祭… 4月14日か15日に開催。ハリストス最大の行事でクリスマスよりも盛大である。  
※「人首正教会 教会日誌」明治43年5月1日の項には、午前9時廻家祈禱、午後1時祝賀会、復活大祭夜参拝者50余名とある。
- 記憶祭（パニシダ）…お盆の中日、又は彼岸の中日に、臨機応変の形で行う。<sup>23</sup>
- 降誕祭…12月ではなく、1月14日か15日に岩谷堂教会で行う。  
※復活祭と降誕祭は2大祭と呼ばれている最大行事。<sup>23</sup>
- 祈禱…月に一度（未定の土曜日）、岩谷堂正教会にて。盛岡から司祭が来て、聖体礼儀（パン葡萄酒を戴き、常に自分に神が存在する意味）と痛悔（神に懺悔して許しを請う）を行う。岩谷堂正教会と合併する以前の昭和58年までは3ヶ月に一度、6ヶ月に一度ほど行った。<sup>23</sup>  
※明治42年9月以降の「人首正教会 教会日誌」を見ると、10月に関しては毎週土日に祈禱が行われ、平均して16人前後の参拝者が見られる〔人首1909〕。  
※人首では降誕祭・復活祭の二大祭と毎月の行事には主に戸主が行く（人首正教会の場合は6名）。戸主がいない場合は、家の者が代わりに行くようだ。<sup>23</sup>
- 日曜学校…昭和55年以前の昔は人首正教会で行った。<sup>23</sup>  
※記録では明治17年5月に開設され〔人首1898〕、明治42年10月に日曜学校（授業）も2回開かれ平均9名の参加者である〔人首1909〕。
- 日々の祈り…個人毎に朝晩行う。親類縁者やハリストテニアン（ハリスト

23 平成2年8月15、18日、故 菊池修行さん（明治43生）からの聞き取り。

ス正教信者)の冥福を祈る。就寝起床前後や食事の前後お祈り時に十字を切ったりする。

- その他…人生儀礼的なものはなく、年中行事を繰り返すのみ。<sup>23</sup>
- 葬儀…葬儀は、教会の世話役が葬儀委員長となり、盛岡や一関などの教会から神父様を呼ぶ。人首には教会堂が無いため、亡き人の家で行い、先祖が眠る自徳寺共同墓地に葬られる。墓地の木製十字架には「神僕○○○○(洗礼名)○○○○(俗名)の墓」(男性)。「神婢○○○○(洗礼名)○○○○(俗名)の墓」(女性)。と記す。<sup>23</sup>

- 供養…<sup>みつかさい</sup>3日祭、<sup>なのかさい</sup>7日祭、<sup>はつかさい</sup>20日祭、40日祭、一周忌等も別に行う。

一周忌以後の追善供養は無し。その他、記憶祭(パニシダ)と言ってお盆や彼岸の中日等臨時に行うものあり。<sup>23</sup>

※ハリステニアンは神はキリスト(創物神)のみで、一つの神を信仰しているというプライドを持っている。八百万神は神ではなく、慣習上頭を下げ線香を焚く形。<sup>23</sup>

※人首正教会では、明治16年には初めての信徒親睦会や討論、教理研究が催されている〔人首1898〕。また明治34年頃にも演説会、婦人会、日曜学校、討論会等があった様子〔岩手県教育會1925p229〕。

人首の正教会について述べると、現在は行われていないが、かつて行われていたものに、信徒親睦会、討論、教理研究(明治16年)、演説会、婦人会、日曜学校、討論会(明治34年頃)等があった。教理を学ぶ教理研究、日曜学校以外の、討論・演説会などは、信仰というよりも社会的指向性を持った行事であるのが特筆される。人首正教会の場合、平成5年現在、2大祭と呼ばれている最大行事の降誕祭・復活祭と毎月の行事参列には主に戸主が参加することになっている。参列者6名。このことから、家族で参列と言うよりも、地域の寄りあいに見られる義務的な会合の場合の出席と同じような、教会信者の日常参列の様子と伺える。祈祷に関しては、昭和55年までは3ヶ月又は6ヶ月に一度行われたが、昭和55年から岩谷堂正教会に行っておこなうようになって以降、月一回の実施になる。この行事は明治期では毎週土日に開始された記録も見え

〔人首1909〕、時代が下るに従って祈祷開催の頻度が減少していく様子が見える。これは司祭の有無とも関係しているのと思われ、次第に人首正教会への司祭の来会が困難になっていた様子を表すものであろうか。以上行事の様子を整理すると、信者数が最大に達した明治期がやはり一番活発な様子が伺える。また現在行われていない明治期の討論、演説会〔佐藤1984p241～249〕、教理研究、日曜学校、信徒親睦会、婦人会などの催し物や会合から、明治という、封建制から脱皮して近代化に向かっていく時代性と、増加していく教会信者の要望・ニーズ等が、ここに映し出されている様子が伺える。それが時代が下るにつれて昭和期には信者不足で、人首正教会と15km離れた岩谷堂正教会に合併しそれで降平成期には行事参加も定型化し、遠い岩谷堂教会に行く都合上、家の代表者が出席するような形となっている。

#### 〈人首カトリック教会の各種行事〉

- 復活祭（4月始め頃）…4月の第1、2日曜日水沢教会にて実施<sup>24</sup>。人首教会の信者では少なくとも3軒の方が出席していた<sup>22</sup>。
- 聖母の被昇天（8月15日）…人首教会にて。水沢教会から神父さん来て、御ミサを上げ<sup>22</sup>、神父と互いの信者が先祖の墓参りをして、最後は共同墓地のマリア様の像の所に集合する<sup>24</sup>。  
※人首では、地域の檀家の慣習に従って、初七日・二七日・三七日・四十九日・百日・一周忌などという仏教の法事の際に、隣組（両隣10軒）がお墓参りして拜んでくれるので、それに従う。僧や神父はつかない形。ただし3年目や5年目など拜んでもらいたい際には、8月15日のこの日に神父が人首に来るので、その際に神父に拜んでもらう。<sup>22</sup>
- 死者の月（11月5日 or 10日前後）…キリスト教では11月は死者の月の為、亡くなった人をその月にまとめて拜む<sup>22</sup>。ミサを行い、キリスト教の信者の墓参りをする<sup>24</sup>。  
※葬儀は、人首教会にて水沢から神父が来て行う。様式はカトリック

24 平成2年8月19日、故 薄井 磯さん（大正4生）からの聞き取り。

だが、地域の隣組や親戚などの手伝いあり。自徳寺内の共同墓地に埋葬。信者家は古くは檀家であったため、先祖の墓地に埋葬。墓地の木製十字架には「霊名〇〇〇（洗礼名）」と付け、木製十字架の側面に俗名を裏に没年を付ける。年忌法要は特になく、遺族の希望があれば随時神父に御ミサを上げてもらえる。<sup>24</sup>

- クリスマス（12月の不定日）…水沢教会とぶつからない冬休みの前あたりの17日か18日頃か、月末の30日頃にも実施。午後3～4時は子供のクリスマス。信者以外の子供が多く参加。40～60名ほど。教会でも誰でもおいでと声をかける。紙芝居や幻灯機などの催しも有り。午後5～6時は御ミサで信者が夫婦などで集まる。各自持ち寄りによる会食。<sup>22, 24</sup>
- 御ミサ（毎週木曜日）…平成5年4月にシスターが人首教会に常駐するようになってから、毎週木曜日に実施。水沢教会は日曜日に行く。人首教会には水沢教会の神父が木曜日に来て行う。午後4時～5時頃。前半30分はミサ。その後は談話など<sup>22</sup>。このミサは8～10人ほど、人首の信者の他に近隣地区の藤里・岩谷堂地区の信者さん、そのほか声を掛けた、親しくしている人首のハリストス正教信者一人がまれに来ることもあり。基本的にはカトリック信者しか参加しない<sup>25</sup>。ミサの際に献金をする<sup>24</sup>。
- 信徒総会…水沢教会で年一度、年末か年頭にあり。信者のうち60名前後が出席。<sup>24</sup>

人首のカトリックについて。高齢の信者によるとかつて子どもの頃に、人首教会に来る外国人の神父から「偶像を拜んではダメだ」と言われたが<sup>22</sup>、今では大目に見てくれるようになったという。またかつて信者が葬儀の際には「いつかよみがえる時のために土葬にし、火葬はダメ」と神父に言われ、土葬にしたが、その後外国人の神父も火葬を認めるようになったとのこと<sup>22</sup>。また地区のつきあい等で、「初七日・二七日・三七日・四十九日・百日・一周忌などという仏教の追善供養の周期の際に、隣組（両隣10軒）がお墓参りして拜んでく

---

25 平成5年9月15日、シスターである中村さんからの聞き取り。

れるので、それに従う」とあり、キリスト教とは異なる仏教的な先祖供養の慣習、さらには地域の慣習にも柔軟に従う教会や信徒の日常の姿がここに垣間見ることができる<sup>26</sup>。

以上ハリストス正教、カトリックを見てまとめると先にも述べたように以下の二点の特徴があげられる。①昭和期から平成期には信者数が減少し、行事参加が定型化して家の代表者が出席するような形が見られること（ハリストス正教）。②クリスチャンの信仰とは異なる仏教的な先祖供養の慣習、さらには地域の慣習にも柔軟に従う教会や信徒の日常の姿が見られること（カトリック）。①に関して考えると、昭和58年人首ハリストス正教会の、岩谷堂正教会との合併以降、15km離れた岩谷堂正教会に出かけなければならなくなった事情が影響しているのかもしれない。②に関して言えば、たとえば火葬に関しては、条例で土葬を制限・禁止している地方自治体もあり<sup>27</sup>、カトリック教会として日本の現状への対処という、現実的な側面への対応とも考えられる。カトリック信者とハリストス正教信者の宗教的な相互の交流については聞かれないが、「たまに声をかけた際にカトリック教会の方に、ハリストスの特定の信者さんが一人で来ることもあるが、行事に出ることはない。」とあり<sup>25</sup>、儀礼での交流等は無い様子である。

#### 4. 信者数の変遷

次に信者数の移り変わりを見ることとしたい。ここで気になる点として、信者数の急激な変遷があげられる。最初にハリストス正教の事例、次にカトリックの事例をあげる。

---

26 それでも年中行事等の供物を捧げる対象が無いキリスト教信者の嫁が、仏教徒の家庭に入嫁後には「朝など水を供えることを忘れてたり仏よりも前に箸をとったりなど、失策を演じがちである。」といった民間信仰や年中行事の習慣欠如状態が見られるとの報告もあり〔森岡1953p113〕、キリスト教徒の、家庭における年中行事の省略化が著しいという側面はあるものと思われる。

27 たとえば盛岡市は感染症者埋葬の場合は火葬が義務で、土葬埋葬地区も条例で禁止地区が定められている（H30年9月時点での盛岡市ホームページより）。

### 〈人首ハリストス正教会の信者数変遷〉(表1)

22名 <sup>10</sup> → 85名 <sup>28</sup> → 120名余 <sup>28</sup> → 47名 <sup>28</sup> → 24名 <sup>29</sup> → 17名
(明治13) (大正11年) (大正末) (昭和6～16年) (昭和56) (平成5)

※参考…明治30年は32軒、昭和19年頃信者8軒、平成2年は6軒、平成5年時には信者6軒。<sup>23、30</sup>

### 〈人首カトリック教会の信者数変遷〉(表2)

52名 <sup>31</sup> → 60～ <sup>32</sup> 170名 → 40余名 <sup>33</sup> → 30名余 <sup>34</sup> → 10数名 → 6名
(明治19) (明治41) (大正14) (昭和26頃) (平成2) (平成5)

人首ハリストス正教会の現象として、明治初期に新たに布教されて以降、大正期頃までが信者数が最大数と思われ、昭和期以降減少傾向を示す。特に大正末以降から第二次世界大戦までの信者・戸数の減少傾向が目立つ。さらに信者数が戸数で表現可能な点から言って、人首のハリストス教会においては、比較的家毎の信者加入であった様子も伺わせる。次にカトリック教会に関しては前掲の信者数変遷(表2)を見ると明治後半に信者数が最大数となり、大正期以降減少傾向を示している事がわかる。実は人首カトリック教会の明治期における、年ごとの受洗者数(『巡回名簿』四ツ家カトリック教会保存〔大正14年に人首

28 大正11年、昭和6～16年信者数データは菊地和恵1986p49、人首ハリストス正教会1922『信徒現在調整簿』より。大正末信者数データは岩手県教育會江刺郡部会1925p229、江刺市史編纂委員会1990p107より。ちなみに人首ハリストス正教会1922『信徒現在調整簿』や菊地和恵1986p71には179人(通算か)との記載も見られる。

29 盛岡・盛ハリストス正教会連絡協議会1981

30 話者の故菊池修行さんは人首生まれ。大正中期小学生時期に人首を離れ、昭和19年33歳の時に人首に戻ったため戦前の様子は不明とのこと。彼の知っている人首で信仰を離れた家は6軒。平成5年現在信者は6軒で合計12軒の信者の家があったという。かつては一軒に6、7名家族がいたため72～84名の信者がいたことになるが菊池さんは言う。

31 四ツ家カトリック教会『巡回名簿』(1884～1908)〔本稿p38表3に掲載〕、菊地和恵1986p42表3「人首カトリック教会 信者統計」1886年(明治19年)の箇所より。註18参照のこと。

32 水沢カトリック教会1982p5にはおおよそ60人とあるが、四ツ家カトリック教会『巡回名簿』(本稿p38表3)を見ると、明治17年から明治41年までの受洗者数合計は179名であった。尚この数字は死亡者転出者等を含まない受洗者累計である。そのため明治41年時点の信者数は、60～170名とした。

33 岩手県教育會江刺郡部会1925p228

34 平成5年11月6日 故 薄井 磯さん(大正4年生)からの聞き取り。7軒の信者約30人がいたとのこと。

教会の所属が盛岡から一関に変わるが、変わる以前の史料と思われる物、菊地和恵1986p41]) 記録を偶然手にすることが出来たため、以下に示した。

〈人首カトリック教会 明治期受洗者数〉(表3)

明治 17 (4人)	明治26 (0人)	明治35 (1人)
18 (39人)	27 (14人)	36 (0人)
19 (9人)	28 (13人)	37 (0人)
20 (14人)	29 (13人)	38 (1人)
21 (9人)	30 (21人)	39 (0人)
22 (5人)	31 (11人)	40 (3人)
23 (6人)	32 (0人)	41 (3人)
24 (3人)	33 (2人)	
25 (5人)	34 (3人)	

先ずこの表に関して述べるならば、①明治期の早い段階での、多くの受洗者数が明治18～20年頃に見られる。この理由として、明治17年に人首カトリック教会堂が建立され、地域の人々の耳目を集めたこと。さらに記録によれば当時人首教会は常住伝道師又は信者の管理にまかされる状態であり、臨終などの緊急時でなくても伝道師が洗礼を受けることが許されていたと言う理由が挙げられている〔江刺市1987p263〕。②次に明治22年から明治26年までの時期、急激な受洗者数の減少が見られる。これについては、明治23年1月にはハリストス正教が人首に壮麗な教会堂を落成し、人首地区の人々の注目を集めたこと。明治26年、ハリストスの聖ニコライが東北巡回の際に人首に至ったことなど、この期間人首地区におけるハリストス正教の話題に欠くことは無かった等の理由により、この時期のカトリック受洗者が少なかったのではと人首カトリック教会側が理由を分析している〔水沢1982p4〕。③その後明治27年から31年まで人首カトリック教会2期目の信者数大幅増加時期にあたり、④明治32年以降はまるで潮が引くように受洗者数の激減・少なさが目立つ。記録によると近隣の人首ハリストス正教会では明治34年頃には演説会、婦人会、日曜学校、討論会が開催されて(本稿 p26参照) 活発な活動が伺え、ハリストス正教会側へ入信者が流れていった結果の表れとも見る事が出来るし、もしくは封建時代から解

放された明治期の熱気、一時期キリスト教への入信に向かっていたその熱気が、明治後半期以降冷めてきた影響なのか、もしくは地域の何かの変化が起きたものか、様々な原因が考えられるところではある。人首カトリック教会の信者数ピークは表2より、明治41年60～170名、大正14年40余名と言う数字から、明治期後半と想定される。そして明治32年以降の年入信者数がわずかな状況からすれば、その後信者数が自然減社会減等で次第に下降し続けていくことで、その後現在に至ったものと想定される。ところで他県他地区ではあるが、同様に明治期の教会信者数がわかる記録を偶然手にしたため、ハリストス正教の例ではあるが、以下にその事例を紹介したい。明治期宮城県、石巻伊望教会信徒領洗者数の変遷（明治10～45年）データが現存する為それを見ると、①明治17年～22年が増加の最大ピークを示し、②明治21年～27年間に急激な信者減少、落ち込みが見られ、③明治32年に2期目の信者数幅増加時期にあたり、④明治32年以降は潮が引くように受洗者数の激減が目立つ。以上の傾向は教派及び県域が異なるのにも関わらず、驚くほど人首カトリック教会の表3の現象とほぼ同一の傾向を示している。これは明治という時代性が教会受洗者数に直に反映している結果のようにも思われ、さらなる他事例との比較が必要などころではあるが、示唆的な数字と言える〔波多野1969p385〕。

次に人首教会の『巡回名簿』明治17年（1884）から明治41（1908）年までの間の年齢別の信者数を菊地和恵が表に整理したものがあるため、それを以下に記す〔四ツ家、菊地1986p67〕。

〈人首カトリック教会 明治17年～明治41までの信者年齢〉（表4）

0～9才（67人）、10～19才（20人）、20～29才（33人）
30～39才（14人）、40～49才（11人）、50～59才（4人）
60～69才（8人）、70～79才（5人）、80以上（2人）

これを見ると、明治期の入信者164名中（表3の合計人数と異なるのは、表4は年齢不詳はカウントされていないからである。そのため表3と表4のデータには多少誤差があるが、傾向をつかむ目的でここでは使用した）40%が0才から9才までの信者。53%が0才から19才までの未成人層。73%が0才から29

才までという教会信者の年齢層を示しており、9才までの信者数率から言えば、教会が若い信者集団であったことが伺える（参考は大正10年当時の日本の全国平均寿命は42.06歳〔縄田2006p95〕）。考えられるこの原因は①幼児洗礼による信者増の側面、②家族そろっての入信状況下での当時の子供の数の多さからくるもの〔縄田2006p95～p96〕。③10～29才が32%に及ぶ点から新しい物好きの若者層への浸透傾向大の側面も考えられ、以上の三つの要因が想定される。

その後人首カトリック教会では学習後、本人の意志を確認してからの入信に変わったため幼児洗礼が少なくなり<sup>22</sup>、信者の高齢化等による自然減や転出による社会減を補充するほどの新しい信者獲得要因もないまま今（平成5年当時）に至っている観がある。また戸主層が信者にならない場合、家の信仰としてキリスト教が継続されないため、その理由も考えられる。この点に関しての詳細は、次号以降の別稿で信者の実態を探りたい。

## 5. まとめ・考察

人首への両教会における布教開始の動機は、住民の要請（ハリストスは住民の要請、カトリックは婿養子として信者が人首にやってきた縁）であり、一説の隠れキリシタンの影響云々〔江刺市1987p262〕等の入信理由は直接見聞き出来ず、特別の理由は見当たらない。しかし盛岡に次いで岩手県内二番目として明治17年、人首カトリック教会堂が建てられ〔江刺市1987 p262〕、ハリストス正教もその直後の明治23年に人首に教会堂を建て〔江刺市1987 p264〕、郡部において岩手県内で唯一2つのキリスト教信者地区が重複する場所となる。明治期という早い段階からのこの布教状況に、特別な理由がありそうだと当初は想像されたが、特段の理由は見当たらない。むしろ明治末期に向けて両教会とも異常な早さで信者数を獲得していく、その経過が目を開く。この急増の背景ははっきりしないが、教会での各種行事面からその一要因が伺えそうである。ハリストス正教で言えば人首教会では現在では行われていないが、明治34年当時では演説会、婦人会、日曜学校、討論会等が行われていた（本稿 p26参照）。これらの行事のなかで特に演説会や討論会は教会活動としてはちょっと異質な

ようにも思われ、現在と比べて見ると社会的な活動の側面が感じられる。推測すると江戸期の封建制から、明治期の市民運動活動が許される時代が変わり、以降の人々の高揚感が伺えるようにも映る〔波多野1969 p385〕。宮城県内明治期のハリストス正教会各地活動を見ても、初期の自由民権等の社会活動や、道（商社活動）、石巻（野蒜築港を契機とした商社活動、地域活性化活動）の各地ハリストス正教会に見る地域・経済活動など、当時の信者活動・動きには、個人の信仰活動だけと言うよりも、国会開設等の人権活動や地域社会・経済活動が目を引き〔佐藤1984、佐藤1992、森田1988p280～289、波多野1969、宮城県1961p630〕。これについては明治初期、旧士族信者が社会活動を教会活動の一環として実践したという側面もあるようである。現在と明治の違いは、実は上記の社会的・経済的活動の高揚（喪失）、そして新しい時代への働きかけを、キリスト教活動を通じて実践活動するという面の有り無し（特にハリストス正教側に強く見られる）が大きいように感じられる。新しい明治新国家や地域作りの活動の場としてのキリスト教、そしてその活動に参加している意義を感じる場としてのキリスト教という、現在には見られない目的・活動意識の高みが、明治期初期から中後期にかけての信者急増の背景にあるのではないと思われるのである〔波多野1976p630～631〕。人首両教会の例だけ見れば、宮城県のような社会活動としてのキリスト教の面がクリアーに見いだせない面も見られるが、宮城県のハリストス教会各地の活動歴からすると、同時代の岩手県でも同様な状況や信者意識が想起される。このような“時代状況・背景”から来る入信動機という点で、信者急増の理由を探り出せる要素はあるかと思う。

次に信者数の減少傾向について述べたい。平成5年現在までに両教会とも明治期に比べ急激な信者の減少傾向が見て取れる。さらに平成5年当時の人首信者の平均年齢（ハリストス56.4才、カトリック65.8才〔筆者調査〕）から考えれば、両教会とも教会信者の著しい高齢化が見て取れる。新しい信者の加入も見込めない状況のまま推移していくとすれば、今後人首教会の消滅までも頭の隅に思い浮かべてしまうそんな思いを感じるころである。以下に信者減少の原因について少し考えてみることにしたい。

先ずはじめに、先ほど挙げた、「新しい明治新国家や地域作りの活動、そしてその活動に参加している意義を感じる場＝キリスト教」と言う側面の喪失が挙げられる。さらに他の理由として信者の高齢化等による自然減も考えられる。

また水沢カトリック教会の故 笹氣直哉神父（平成5年当時）も他の視点から信者の減少理由について次のように述べている。「日本の年中行事は稲作儀礼に大いに関係しており、豊作祈願が年中行事の中のテーマであり、又それが主要な目的で執行されている。キリスト教はただ唯一の神を信ずる宗教であり、原則としていかなる神をも祈りの対象としてはならない。そこで日本のあらゆる祭礼にも原則として参加してならないことになる。ここに地域社会と見えない相克が生ずる事になる。この相克に耐えながら地域社会における少数の信者は生きていく、生活していかななくてはならないことになる。これが他宗への転宗の大きな理由ではなかろうか？」と。『江刺市人首カトリック教会 百年間の歩み』には、信者数減少の理由が4つ挙げられており、うち2つに今回本稿で取り上げた“歴史的・時代的な要因”である①軍国主義の台頭、②戦争のための混乱が挙げられている。①、②に関しても信者減少の要因に十分上げられる事柄であろう。戦争中は時勢柄、英米文化は極端に制限ないし忌避させられたであろう。キリスト教に於いてはなおさらであり、表立っての信仰は困難を伴ったことが多少考えられるからだ。また不況時<sup>35</sup>や戦争時に於いてはなおさらである。

ここで大まかに結論として言わせて頂くならば、人首のキリスト教信者の現状は、なにも教団の働きかけの強弱だけからくるものではなく、むしろその信者のおかれている時代の状況に大きく影響を受けて現状に至っていると考えられるのではなかろうかと言う点である。つまり宗教といえどもその時代の影響をどっぷりと受けながら推移すると言うことである。

以下には、戦争当時の、日本でのキリスト教に対する行政側の考え方と人々への影響、及びキリスト教に対する一般日本人の見方それぞれの状況が伺える

---

35 人首ハリストス正教会1898の記録より、明治15年の項を見ると「景気不況 参拝者少ない 供給費少なくなる」とある。

ため、記した物である。おそらく戦争当時のキリスト教の置かれた厳しい時代状況が伺えるものである。以下の文章をも含めて、時代から影響を受ける宗教の実態を探ってみた、本稿の結論の一助としたい。

#### 参考記事〔朝日新聞1994年7月21日 朝刊〕

横浜市 小松峯子（無職67歳）

（中略）昭和十九年一月二日の夜。特高と名乗る二人の男性が私宅を訪れ、私に明日警察に出頭するように、と告げました。当時、私は十七歳の学生で、ただの軍国少女の一人に過ぎず、警察に呼び出されるような心当たりは全くありません。理解に苦しみ、眠れぬ一夜を過ごしました。翌日出向いたら同教生が一人来ていて、二人は別々の取調室に入れられました。質問の内容は、私の学校の行事、授業の内容、先生たちの戦争に対する批判的な話の有無などでした。私の学校はキリスト教精神に基づくミッションスクールでした。夕方、調書に拇印を取られてようやく解放されました。卒業後、何年もたって同級生が幾人も私と同じような目にあい、そのため学校を中退した人もいたことを知りました。真偽のほどは今も分かりませんが、風の便りにクリスチャンの日本人の先生方もいろいろなことがあって、随分ひどい仕打ちを受けられたと聞きました。外国人の先生はすでに交換船で帰国されていました。こんな些細な事柄は記録するにも値しないことだと思いますが、特高の二文字がなぜか心の片隅に残って離れません。

尚、本稿掲載の御快諾を賜った東北大学宗教学研究室の関係者さま、本稿調査に際してインタビュー等でご協力いただいた信者の方及び関係者の方々には篤く御礼を申し上げます。特に本稿に掲載した信者の方々は既に皆故人となられており、生涯を通じて信仰を守り通したその人生に敬意を表したい。また本稿執筆中に知ったのだが、人首に住むハリストス正教徒は平成30年現在一人だけであるという。さらに人首のカトリック教徒は10年ほど前に無人となり、教会堂は平成22年に老朽化で取り壊され、無くなってしまったとのことである。

## 参考文献

- 朝日新聞1994年7月21日
- 逸見英夫1984「宮城県下耶蘇教講説事件」『宮城の研究第6巻近代編』清文堂出版
- 泉 琉二1972「山村におけるキリスト教の受容（一）——和歌山県日高郡竜神 村下柳瀬地区におけるカトリック教会の設立——」『待兼山論叢 5 哲学篇』大阪大学文学部
- 岩手県1965『岩手県史第十巻 近代編5』
- 岩手県教育會江刺郡部会1925『江刺郡志』臨川書店
- 内海健寿1979「東北地方におけるハリストス正教と地域社会——歴史における宗教と経済——」『会津短期大学学報 人文・社会科学編 36号』会津短期大学
- 江刺市史編纂委員会 1978『江刺市史 第五巻 資料編 近代Ⅰ』
- 江刺市史編纂委員会 1979『江刺市史 第五巻 資料編 近代Ⅱ』
- 江刺市史編纂委員会 1985『江刺市史 第二巻 通史編 近世』
- 江刺市史編纂委員会 1987『江刺市史 第三巻 通史編 近代・現代』
- 江刺市史編纂委員会 1990『江刺市史 第四巻 江刺の社寺旧跡』
- カトリック中央協議会 1994『教会所在地 '95わたしたちのきょうかい』
- 川端純四郎1989「中新田の初期のキリスト教布教」『中新田町史研究』創刊号 中新田町史編さん委員会
- 菊地和恵1986『岩手県江刺市におけるキリスト教信仰の一考察——岩手県江刺市米里の事例——』東北学院大学卒業論文、水沢カトリック教会所蔵
- キリスト新聞社1993『キリスト教年鑑1993』
- 国立歴史民俗博物館「ハリストス正教会・自由民権・開化万華鏡」1996時点の展示リーフ
- 佐藤憲一 1984「宮城県の自由民権運動」『宮城の研究 第6巻 近代編』清文堂出版
- 佐藤憲一1992「ギリシヤ正教の受容と地域の結社——佐沼顕栄会と広通社に

ついで——』『近世日本の民衆文化と政治』河出書房新社

- 仙台郷土研究会編2012『仙台藩歴史事典 改訂版』
- 仙台ハリストス正教会2004『仙台ハリストス正教会史』
- 胆江日日新聞2013年5月11日
- 縄田康光2006「歴史的に見た日本の人口と家族」『立法と調査』No.260  
参議院
- 日本カトリック中央協議会編1969『日本カトリック年鑑一九六九～七〇』
- 波多野和夫1969「新宗教の受容と教会の形成——陸前北部におけるハリストス正教について——」『陸前北部の民俗』吉川弘文館
- 波多野和夫1976「外来宗教受容の一形態 日本ハリストス正教会の場合」『和歌森太郎先生還暦記念 古代・中世の社会と民俗文化』弘文堂
- 人首カトリック教会1897『信者名簿』
- 人首ハリストス正教会1898『人首正教会史扣復活會』（明治12年～31年）
- 人首ハリストス正教会1909『人首正教会 教會日誌』
- 人首ハリストス正教会1922『信徒現在調整簿』
- 平凡社1990『岩手県の地名』
- 宮城県1961『宮城県史12（學問宗教）』
- 水沢カトリック教会1982『江刺市人首カトリック教会 百年間の歩み』
- 森岡清美1953「日本農村における基督教の受容」『民俗学研究』第17巻第2号
- 森岡清美1975『現代社会の民衆と宗教』評論社
- 盛岡・盛ハリストス正教会連絡協議会 1981『盛岡・盛ハリストス正教会管轄教会信徒名簿』
- 森田敏彦1988「ハリストス正教と民権運動」『図説宮城県の歴史』河出書房新社
- 山下須美礼2014『東方正教の地域的展開と移行期の間像——北東北における時代変容意識——』清文堂
- 四ツ家カトリック教会1884～1908『巡回名簿』

# Christianity in the *Hitokabe* District of Esashi Ward, Oshu City, Iwate Prefecture

— The formation of a new church and its historical background glimpsed from the change in the number of believers —

Hiroyuki Oikawa

Iwate Prefecture Oshu City Esashi Ward *Hitokabe* District is located at the eastern end of the Esashi Ward, Oshu City, and is now a depopulated area. I happened to know that there are three religions in this *Hitokabe* District, Christian Orthodox Christianity and Catholicism, Shinto funeral district (funeral in Shinto). The strange feeling I felt at the time, interest became the trigger for the investigation. This time, focusing on the two churches of Catholicism and Christian Orthodox Christianity among the various religious organizations, I focused on the following three subjects of “historical factors” . 1) To clarify the reasons and circumstances that the two churches suddenly came into being in the Meiji era. 2) To draw the process that the church continued without disappearing until the present time of Heisei (as of 1993). 3) Changes in church activities and changes in the number of believers are to be closely watched with the relationship with the movement in the world during the Meiji, Taisho, and Showa era of Japan.

In conclusion, 1) is what happened from the desires of residents, but the background is that hope for the new era of the Meiji era of people and a desire to potential change can be seen.

With regard to 2) and 3), the number of followers of the Christian Orthodox Church of Japan decreased in a form involved in the Russo-Japanese War and the Russian Revolution. Conversely, the number of Catholics continues to grow, and the opposite situation can be seen. If we limit to the two churches in the investigation area, the number of believers continues to decline, and now (as of 1993) the number

of believers is small. In the case of Japanese Christian Orthodox Christianity, I concluded that the cause of the decrease in this believer is the influence of the era. Only in the *Hitokabe* District of Esashi Ward, there is a tendency for believers to decrease in both Christian Orthodox believers and Catholics. In the next paper, I would like to explore the cause while paying attention to “geographical and social factors” in the *Hitokabe* District.